



年頭のご挨拶

新年明けましておめでとう御座います。

昨年は映画『劔岳 点の記』の柴崎芳太郎に元氣付けられた1年でした。

そこで今日はこの場をお借りして、戦前の台湾で、人のため、世のため力の限りを尽して頑張った2人の日本人土木技師の事績を紹介させて頂き、今年の元気の素にして頂けたらと思います。

平成19年10月、台湾南部の高屏溪こうへいけい（流域面積3257km²、源流：玉山3962m）下流部にある河川公園を訪れた時のことです。たまたま頭上を古びた鉄道橋が横断していました。由来を聞いてみますと「この鉄道橋は、今では使われていませんが、日本人技師が架けたもので、その功績を顕彰するために保存することになっています。技師の子孫の方々をお招きして式典も挙行了しました。」ということでした。

帰国後調べてみますと、その技師の名は飯田豊二いいだ とよじ、台湾総督府鉄道部高雄出張所の技師で、明治44年から高屏溪の鉄道橋（1526m）建設工事に携り、大正2年6月竣工を目前にして40歳でマラリヤのために亡くなったということが分かりました。鉄道橋はその年の12月に竣工しています。当時、内地、朝鮮、台湾を含めて日本で一番長い鉄橋でした。鉄道部の友人達は彼の功績を讃えて碑を建立しました。碑は戦後も台湾の鉄道局員蘇進徳らに守られて、破壊されることもなく、今も九曲堂駅（橋ができる前の縦貫鉄道の終点）の前に立っています。この鉄道橋ができてはじめて、それまで高屏溪により分断されていた台湾南部が一つになり、南部の発展が可能となったのです。

高屏溪を渡り屏東から南下しますと林邊溪りんぺんけいの河口に出ます。この林邊溪と高屏溪に挟まれた屏東平原は、雨季には洪水が襲い、乾季には一滴の水もなくなる不毛の地でありました。明治の末「台湾製糖」が総督府からこの不毛の地2128haを払い下げてもらい、砂糖黍農園さとうきびとして開墾することになりました。そこで内地から招聘されたのが鳥

社団法人 日本測量協会

関西支部長 宮 井 宏

居信平いのぶへい技師でした。

鳥居信平技師は大正3年10月台北で台湾製糖農事部水利課長の辞令を受取ると直ちに屏東に向いました。途中高屏溪の鉄道橋を汽車で渡っています。それから7年、灌漑用の水源探しや原住民との意思疎通、調査、設計などに没頭し、大正10年6月ようやく起工式に漕ぎつけました。

灌漑用水源には林邊溪の伏流水ふくりゅうすいを用いることにし、林邊溪が山地から屏東扇状地へと出る扇の要に当る所に、河床を掘り下げて横断方向に長さ327.6mの伏流水取水堰を埋設します。堰の断面は中空の直角3角形で、垂直の一边は高さ3mで下流側に立ち、水平の一边は河床下7m（標高75m）の所に水平に設置されます。斜辺は上流側に向けられ、斜辺長2.8m×川幅327.6mの斜面を形成し、そこには長さ2.12m×幅0.06mのスリット1365本が開けられています。上流からの伏流水はそのスリットを通して3角柱の中に落ちこみ、河の横断方向に流れて、導水路を通り、農地へと自然流下で流れて行きます。

灌漑施設と農園は大正12年竣工しました。堰は二峰圳にほうしゅうと命名され、豊水期には25万m³/日、渇水期でも7万m³/日の農業用水を供給しました。新農場に移住してくる農民達が、砂糖黍栽培の傍ら自分たちの米、サツマイモ、野菜などを自給自足できるよう、彼らの田畑の灌漑用水や飲料水も十分確保されていました。鳥居信平と台湾製糖の技術者達は一企業の社員でありながら「農民達に希望を持たせる農園作り」を目指し、それを立派に実現したのでした。

「コンクリートから人へ」と言った宇宙人がいます。宇宙語で「コンクリート」が何を意味しているのか知りませんが、もしも「土木技術」を指しているのだとすれば、地球上では古来、土木技術は「人による、人のための技術」以外の何物でもなかったということを教えてやらねばなりません。